3版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号： ３２６０８
研究種目： 基盤研究(C) (一般)
研究期間： 2013～2015
課題番号： ２５３７０１７６

研究課題名（和文） 近現代ギリシャ彫刻研究ー過去の記憶と創造「ギリシャとは何か」の問い

研究課題名（英文） The Research of the Modern Greek Sculpture-What is the Greekness ,the Memory of the Past and the Creation

研究代表者
木戸　雅子（Kido, Masako）

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：１０２０４９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：①アテネ高等美術学校彫刻科の教授３名とアテネ工科大学建築科1名の彫刻家を対象に、それぞれの制作活動とその作品研究及び教育理念についての考えを調査することができた。それぞれの個人アトリエでの調査を通じて相互理解が深まり今後相互協力の基盤を作ることができた。②2004年のアテネオリンピックを機に建設整備されたアテネの地下鉄のアート・ワーク調査によって、現代ギリシャ作家にとってギリシャの過去の記憶こそ創造の源であるということを明らかにすることができた。それは古代風というような伝統的形態の借用ではなく、彼らの造形の本質が過去の記憶の中から抽出されているということである。

研究成果の概要（英文）：The results of the meetings with four professors of the Athens Superior School of Fine Arts were quite meaningful to understand each other which were realized in each personal studios where have huge space fulled with their past works and drawings and documents.We discussed about the past and the future of the education of each art school and we agreed to start some collaboration of artistic activities between us.
The research of the Greek Modern Arts ,especially sculptures ,was executed with the Art Project of Athens Subway which was done at the period of the Athens Olympic Games.The conclusion of this research is as follows. The Greek Modern Artists are equally to be conscious to same extent about their past Greek arts like other intellectual people who ask themselves 'What is the Greekness'.As the case of sculptors They don't follow what is called the Greek image but they abstract the artistic essence from the abundant sources of their ancestors.

研究分野： 美術史

キーワード： 近現代ギリシャ美術史　近現代ギリシャ彫刻　ギリシャ公共彫刻　近現代ギリシャ史　比較文化　国際情報交換　国際学術交流　現代美術

１．研究開始当初の背景

近現代ギリシャ文化を考える時にギリシャ人の国民国家形成の基礎となるアイデンティティの問題は非常に重要である。独立以後の急激な西欧化は特に美術において顕著である。それまでの美術表現と全く異なる美術様式を西欧から受容し、それによって西欧の一員であることを示そうとしたことで次第にその矛盾が露呈されることになる。ギリシャの近代化の証でもある美術の西欧化であったが、それはもともと自らの祖先の古代ギリシャ美術を規範とするものであり、自らのアイデンティティのよりどころを西欧から教えられたという捻じれ現象が存在したのである。この問題に関して過去に「近代ギリシャ絵画研究－新古典主義の受容とビザンティンの伝統」と「近代ギリシャ絵画（１９世紀から両大戦間期）研究－ヨーロッパの影響と伝統の再編」という研究課題で絵画について研究を行った。ギリシャ独立以前はビザンティン絵画がその伝統であり、キリスト教が否定した三次元的表現の彫刻は美術の伝統には存在しなかった（一部教会のイコン障壁の浮彫など工芸的彫刻作品は除く）。そのため独立以後彫刻に関しては、絵画のような西欧絵画か伝統的形象かという相対立する表象伝統がなかった。彫刻は当時の西欧の彫刻をそのまま受容した。しかし西欧の彫刻自体が古代ギリシャ彫刻を手本とするものであった。つまり西欧からその技術は学んでもその手本がギリシャには世紀を超えて存在していたのである。近現代ギリシャ彫刻の中にその意識されなかった過去の彫刻がどのように息を吹き返すのか、そこに現代ギリシャ人のアイデンティティを読み取ることは可能かという問題を研究課題とした。

２．研究の目的

トルコから独立して以後近代ギリシャがヨーロッパ文化に急激になじみながら近代国家を創生していく中でギリシャ人たちが自らのアイデンティティ「ギリシャとは何か」の問いを近現代ギリシャ彫刻作品、及び作家に見ようとするものである。独立以前の美術活動とは全く異なる西欧化の道をギリシャ人は自らのアイデンティティといかにおり合いをつけたのかを彫刻で辿る。ギリシャ人にとって彫刻による美術表現は独立以後始まった全く新しいジャンルであった。ヨーロッパから新たに学んだ表現方法からいかに自らの精神世界の表象として「ギリシャ人の彫刻」を生み出してきたかを研究することで、従来古代ギリシャに対してしか関心がもたれず、ほとんど未知である近現代ギリシャ人の精神性を彫刻作品で追うことができる。日本でも長い鎖国を経て西欧に門戸を開放した後急激な西欧化が図られた。明治大正の美術史と近現代ギリシャ美術にはその伝統と西欧化においてどのように折り合いをつけたかという観点において共通点が見出せる。その比較も念頭に置いて現代ギリシャ彫刻における伝統と創造の問題を明らかにする。

３．研究の方法

（1）アテネ高等美術学校の彫刻科の教授ヤニス・ラパス Giannis Lappas,アフロディティ・リティ Afroditi Litti, 元教授セオドロス・パパヤニス Theodoros Papagiannis, アテネ工科大学建築科教授ヴァナ・クセヌ Vana Xenou 氏を研究協力者として現代ギリシャにおける彫刻の制作と教育の現場の調査を行う。上記 4 人は美術大学の教授としてのみならず国際的に活躍する作家である。それぞれ大規模なアトリエを持ち公共彫刻を制作し、廃墟となった工場や遺跡でもインスタレーションや個展などを行う。この 4 人自身がどのような教育を受けキャリアを積んできたか、作品にとってギリシャの過去はどのように反映しているのかなど、それぞれのアトリエを訪問し直接会って議論を重ね作品を個別に調査した。

（2）現代ギリシャの彫刻作品の研究方法として、2004 年のアテネオリンピックを機に整備されたアテネの地下鉄の各駅のアートプロジェクトを調査・研究した。オリンピックを機に建設整備された 2 線の 26 駅にそれぞれ一人づつアーティスト（全 29 名）が選ばれ、駅構内に作品を設置し、一つの駅全体でその作家の美術的世界が生み出されている。このプロジェクトのテーマは、アテネの歴史と駅のある場所に関わるものという条件が課せられた。このプロジェクトに焦点を定めたのは、国家的事業であるオリンピックを機にギリシャの文化的水準を世界にアピールする試みの一環であり、一定の評価を受けているアーティストが選考されたものとみなされるからである。特に本課題研究のテーマである現代ギリシャ彫刻における過去の記憶が作品にどのように表現されているかというテーマに相応しいコンセプトをもったプロジェクトであるというのもその理由である。

４．研究成果

（1）アテネの高等美術学校は、入学の競争倍率が非常に高い難関校である。過去の名を成した芸術家はほとんど同校を卒業している。現代ギリシャの彫刻を調査するために、まずアーティストを生み出している美術大学の教授たちへのインタビューを行った。ピレウス地区の巨大な工場跡をキャンパスにしており、十分な制作のアトリエが用意されている。しかしラパス教授、リティ教授、パパヤニス元教授、またアテネ工科大学のクセヌ教授のいずれも、個人の広大なアトリエを所有し、そこで公共彫刻作品を制作している。それぞれのアトリエを訪ね個別に調査研究をしたが、本稿では上記の作家たちの美術学校での師であるパパヤニス教授について言及する。同氏は出身地のイピロス地方のエリニコという山村の廃校となった小学校校舎をアトリエと個人美術館にしている。広い校

庭跡を利用して毎年夏にアーティストを招待し現地での制作ワークショップを個人的に開催している。この村からさらに山を登り山頂の修道院までの山道に、夏のシンポジウムに参加した人の作品を点在させて野外美術館として整備を続けている。

エリニコ村のアトリエに滞在してその作家活動を見せてもらった。アテネにも大きなアトリエがあり、そこでも大きな作品を作っており、過去の資料が膨大に蓄積している。エリニコの個人美術館の展示とアテネのアトリエに残る作品群で戦後世代の多作の彫刻家の作品とその意味内容についてインタビューと作品調査で行うことができた。パパヤニス氏の場合寒村出身でその故郷の土地に制作の原点があることを強く意識している。そのために廃校となった学校を個人美術館に作り変えて、美術学校退職後もここを拠点に新たな美術活動と後進の指導を行うことに意義をみている。

同氏はアテネ高等美術学校で学んだが、ギリシャ中を旅して古代遺跡や博物館をくまなく歩き回り徹底的にデッサンをして古代の遺物から直接学んだという。現存する膨大な数の素描が研究熱心さの証である。古代以来の彫刻のみならずさまざまな造形物をスケッチしたことがさまざまなシリーズの作品の内容的なエッセンスとなった。徹底的な写生で身に着けた鋭く的確な表現力で種々多様な作品シリーズを作っている。素材はテラコッタ、金属、大理石等多岐にわたる。近年はさまざまな廃材を集めて人物像に作り変えている。その制作方法は、軍事政権下で起きたアテネ工科大学の紛争で焼かれた大学の建物の燃え残った木材などで作品を作ることで、多くの学生が犠牲になった悲劇の記憶を形にして残そうとする作品シリーズがきっかけとなった。同氏の作品の主題はギリシャの歴史的人物に留まらず、聖書の登場人物などに及ぶ。多種多様なイメージが湧きあがる源泉はギリシャの長い過去の歴史を刻む美術作品である。パパヤニス氏の場合は作家が自らの造形的アイデンティティを探求するというよりも、膨大な過去に没頭しその中から国民国家といったアイデンティティを超えて、古代以来のギリシャの過去の美術の中にある造形原理や神髄を引き出していると見える。アトリエに残されている作品やスケッチ、あるいは公共彫刻を調査して、この寡黙な作家がどれほど造形において多弁であるかを見るにつけ、それがギリシャだからこそ造形の可能性が無尽蔵なのだということを思い知らされた。言葉による意味を付加する現代アートとは一線を画し、ものを作ることの原点を体現しているような作家である。（木戸雅子）

（2）<u>アテネの地下鉄のアートプロジェクト</u>

アテネはヨーロッパでも有数の大都会であるにもかかわらず、都市交通の整備は非常に遅れていた。それは一重にアテネが古代以来の遺跡の上に存在しており、そこを掘削するためには常に考古学的調査を余儀なくされるためであった。しかし 2004 年のアテネオリンピックを目指して、2 本の地下鉄建設が着手され（1998 年）、実際にどこを掘っても遺跡が発見されるという中で大幅な遅れはあったもののどうにかオリンピック会期までには間に合わされた。

この地下鉄建造計画は、アテネの都市交通としてはほぼ初めての大規模な事業であったため、都市生活のシンボルとしてさまざまな意味合いが込められることになった。その中でも特徴的なことは、アテネの地下鉄工事によって発掘された古代遺跡や埋蔵物をその場に残し展示するということと、現代文化の象徴として各駅に現代アートを設置するということであった。前者の古代の遺跡の展示は現実の遺跡をそのまま遺構として地下鉄駅構内に取り込んで残す（例：モナストラキ駅他）方法と掘削中の遺跡発見現場の様子を巨大な写真で壁面に展示する方法（例：オモニア駅他）をとり、それぞれの駅で発見された埋蔵品をあたかも博物館のように壁一面を展示スペースにしたり、独立した展示ケースを配置しその間を歩いて通り抜けるという展示方法などで発掘現場に残した。

地下鉄の各駅にギリシャ人のアーティストによる作品を設置する総合的プロジェクトは地下鉄会社アッティコ・メトロによるものである。このプロジェクトのコンセプトは、建築物の内部が機能するという地下鉄独特の無機質な空間を美的で視覚的刺激にあふれる活気に満ちた豊かな美術的建築空間に作りかえることであった。そしてそれぞれの作品に求められたのは、アテネ市の過去と現在を結ぶ歴史やその土地との関連であった。

プロジェクトの美術諮問委員会は、建築家、画家、彫刻家、美術史家、博物館学の専門家などからなり、コンクール部門の選考委員は画家 Dimosthenis Kokkinidis, 彫刻家 Theodoros Papadimitriou,画家 Konstantinos Tsoklis が務めた。

美術諮問委員会がまず選んだのは 1930 ～ 1960 年代の世代の存命のギリシャ人アーティストで iannis Moralis,Chrisa、Gergos Zoggolopoulos。次の世代として Kostas Barotos,Theodora Voutsina,Miltos Papastergiou,Opi Zouni, Theodoros , Stephan Antonakos,Christos Karas, Michalis Katzourakis,Nikos Kessanlis, 他 15 名である。Zoggolopoulo ｓのシンタグマ駅の傘のインスタレーションで有名な<晴天>は作家からの寄付でそれ以外は買い取り作品。

二期にわたる現地調査で各駅の作品と作家についての情報を収集し分析した。総括的には、選ばれた作家たちは、ギリシャにおける 20 世紀を代表するよく知られた作家であること、そのほとんどがギリシャのみならず欧米でも教育を受け、国際的に活動している

ことが指摘できる。表現方法はさまざまではあるが、当然ながら地下鉄に対する見方がそれぞれ示されている。近代国家においてごく当たり前の日常的乗り物でしかない地下鉄に対して、現代の都市生活におけるテクノロジーの象徴として捉え、地下鉄の機能に人間存在と技術発展の関係を見ようとしている。2004 年開業以来地下鉄は清潔に保たれ快適な空間を維持すべく徹底的な環境管理がなされている。結論としてこのプロジェクトは、本課題の「現代ギリシャ彫刻に見る過去の記憶」という研究テーマに非常に適した研究対象であったといえる。このプロジェクトのコンセプト自体がそこにあったからというだけでなく、彼らの作品には常にギリシャの過去が意識されていることがこの研究で明確になった。それは日本の現代アートが伝統や歴史的なるものを削り取っていった流れと比してギリシャに独特なところである。世代的にはミニマリズムを出発点とした作家が多いが、彼らはそのモダニズムの時代にあっても結局ギリシャの過去を切り離してはいない。戦後盛んになった金属彫刻作家が目立つが、ギリシャ人は金属彫刻＝現代というイメージがことさら強い。それは圧倒的に石の文化であるが故であろうか。

以下に特徴的な作家とその作品を上げる。

① アテネの歴史に対する意識が顕著な作品

シンタグマ駅

<地下鉄の時計>2000-2001 年

セオドロス・パパディミトリウ(1931-)

時計をイメージさせる２つの丸いリング、そのうち一つは１２の支持を持ち、中心からは現在の時刻を示す時計が下の空間に懸垂されている。他のリングには円盤が２枚あり１枚は現時刻を指し示している。空間の仮想文字盤を指し示すかのような三角の矢印、大きなリングの一部が全体を支え、すべての円形が時計、そして時間を連想させている。２階部分に展示されている発掘された陶器が持つ悠久の時間と連動されている。

この駅は二線が交差し、国会議事堂のあるシンタグマ広場の下にあるまさにアテネの中心に位置する。地下鉄構内としては最も広い空間を有し、その中心にギリシャ文明が古代から時空を超えて時を刻んできたことを象徴する時計を据えている。その周囲の壁は、古代の地層がそのまま残され、古代世界が今もそこに存在することを証明している。

セオドロス・パパディミトリウは、ギリシャの最も重要な彫刻家の一人でアテネ高等美術学校の後パリやカリフォルニアで学びアテネ工科大学の建築科の教授となる。主に金属による公共彫刻の作品を多く制作している。

ダフニ駅

<デクシレオス>2000 年

ディミトリス・ミタラス（1934-)

デクシレオス Dexileos の墓碑へのオマージュとして細分化した陶器による断片を再構築した作品。この墓碑はケラメイコスの博物

館に所蔵されており、この騎馬像のレリーフは詩人パラマスにその美しさが謳われている。レリーフを細分化してばらばらにされた画面は動きが止まりかねない。しかし作品の中の人物、騎馬の動きは左から右への流れるような動きである。この壁画がある駅構内の人の同線を示す矢印も、左から右への動きとなっていて、通行する人を自然にこの画像に導いている。そして画面の中の右から左への大きな矢印が、注目すべきアテネの英雄デクシレオスを指し示すのである。これはこの駅が直接古代の遺跡とつながっていることを明示するタイプの作品である。

② 都市と地下鉄についてのコンセプチュアルなアプローチ

エヴァンゲリズモス駅

<モット・ストリート>1983 年

クリサ（クリサ・ヴァルデア）(1933－)

この作品には膨大なエネルギーが渦巻いている。混沌、爆発、文化、人種、科学、技術、抑えきれない衝動が蠢いている。クリサはアテネ、パリ、サンフランシスコで美術を学び、ニューヨークに定住してアメリカのモダンアートの初期ミニマリズムの影響を受けた作品で注目され、世界的に活躍する現代ギリシャ美術を代表する女性作家である。題名の<モット・ストリート>は、ニューヨークにあるチャイナタウンの通り名で、多国籍のエネルギーに満ちた喧騒の場に惹かれて制作された連作の一つである。この作品は地下鉄のための新作ではないが、クリサは「アテネはもはや一民族の国家の都市ではなく、さまざまな人種の住民からなる異文化が渦巻く大都会である」という意味でこの作品はアテネの地下鉄にふさわしいという。クリサはニューヨークのタイムズスクウェアで見たネオンに都市文明の象徴を見てそれ以後ネ

オンによる作品を発表する。同時に中国の漢字の形と筆跡が示す言語の象徴性を見て漢字からのインスピレーションを形にしてきた。この作品も鋼鉄の文字が、裏に走るネオンの光によってその筆致がより大胆に強調されている。

アギオス・イオアニス駅
<町は人々の差異を結びつける>2008
クリスティナ・サランドプル（1952－）

今日の世界の人口は７３億３３００万人以上。そして一日に２０万人増えている。その中の一人の指紋の一筋の線を切り出し、二重に重ねさらに鏡に映し出し倍に増幅させている。そして拡大増幅され圧倒的な量感を示す指紋を、都市地図の上にかさねた。人々を象徴する膨大な量の指紋は多種多様な人生を表現しているのか、人口の爆発を暗示しているのか、未来の世界の危惧か、希望か。鬱蒼とした森林の地表をすべて覆いつくす苔が作り出す、圧倒的な塊の量感を感じる作品である。

サランドプルはこの地下鉄アート・プロジェクトの中では比較的若い世代に属す。金属や鏡、その他多様な素材を用いた公共彫刻作品を多く作っている。作品傾向はミニマリズムからコンセプチュアルへと変化させている。指紋は人間存在の偶像であり、日々ここで人々は実際の人間的サイズを越えた作品と向き合いその横を通りながら時刻表に従って一斉に運ばれる大衆の中にあっても別々の個人であることに気づかされる。地下鉄というテクノロジーとそれと向き合う個人としての人間存在の行方を意識させる表現としてインパクトの強い作品である。

ラリサ駅
<小さな人間たち>1980-81 年（設置 2001）
ヤニス・ガイティス（1923-1984）

線路を挟んで向き合うホームにガイティスの有名なシリーズの同名の作品のコピーを設置している。現代ギリシャ美術で最も有名な作家の一人として親しまれている。人物をかたどった椅子の作品を実際にベンチとして使用させる。この作品は、地下鉄の行き来する空間に様々な想念を人々に与える。

私はどこから来て、どこに行くのか？
多数の人々、同じ服装に見えて少しずつ違う。画一的な様相を呈しているが、何かが違う。少しずつの違いは重要か。大衆化の社会、文明の発展、工業の進展、生活の安定。我々はどこに向かっているのか。どこに向かって歩いていくのかと問いかけているようである。

③ 地下鉄駅構内の機能的な空間を別の意味を持った独特な空間に作り変えて、空間そのものを人々に意識させる作品。

アンベロキピ駅
<行列>2000
ステファン・アンドニコス（1926-2013）

青や赤、華やかなネオン管の光が地下鉄の入り口を彩り、それぞれの場所のシンボルとなっている。天井に設置されているが、地下鉄の入り口はエスカレーターや階段が斜めに降りているので、視界に鮮やかに飛び込んでくるだけでなく、人の動線と絡まり合う。形も丸や四角，波状、直線とシンプルではあるが組み合わせることによって多様な表現を作り出している。清潔感のある印象だ。この作家は 4 歳で両親とともにニューヨークに移住した。1960 年代からネオンを使い、建築とコラボした現代アートでさまざまな作品を作ってきた。国際的に活躍しギリシャ系作家ではあるが、洗練されたモダニズムにはギリシャを拠点とする作家たちに共通する重苦しさのようなものが感じられない明るさがある。

エガレオ駅
<柱>2008 年
オピ・ズニ（1941-2008）

四角柱に黒と白の縞模様が描かれている。縞模様の幅が少しずつ変化し太いものから狭くなりまた太くなっている。その色彩の効果で柱が上下に伸びたり縮んだり、あるいは上昇と下降が繰り返されているかのように見える。作品の上の天井部からの採光の効果と相まって、この柱が地下と地上を繋ぐものであることが意識され、地下空間であること

を強調している。

<四つの入広間への入口>2008 年

プラットフォームは大きな穹窿天井と大理石が敷き詰められた床でできている。その両サイドの壁に幾何学的遠近法を使って簡潔に描き出すズニ独特の古代神殿を思わ

せる形態が浮かびあがっている。視線は遠くの空を仰ぎ見るような状態となり、空に不思議な建物が浮いている。エッシャーの絵画のように遠近感がかき乱され、不可思議な実際にはあり得ない建物空間が作り出されている。地下鉄の電車の行き先、終着駅は架空の駅なのだろうかという幻想をも持たせるようなインパクトがある造形である。ズニは遠近法のイリュージョンを使って鮮やかな色面で古代神殿の空間を浮かび上がらせる作品を一貫して作った。このエガレオ駅は、古代ギリシャのデメテル女神の神域で有名なエレフシスへ続くアテネの出口にあたる。地下鉄の線が古代の参拝路と一致しているという土地の記憶と明確に結びついた造形である。<柱>で指摘したように、地下と地上の上昇と下降はまさにエレフシス神話のペルセフォネの黄泉と地上の行き来を思わせるのである。

④　公共空間と素材の関係を考えさせる作品

アギオス・アンドニオス駅

<剣>2009 年

テオドラ・ヴチナ（1954-）

鉄とコンクリート、現代の都市を形作る最も重要な建築資材である。強度をともに兼ね備え、大量生産によってふんだんに供給が可能である。現代のハードの大部分がこの二つの資材によって成り立っている。美術作品の材料も絶えずその時代の材料と向き合ってきた。工業的にはその二つの材料の使い方は技術の革新が図られてきているが、美術など表現のための材料としては、我々の知識はまだ端緒についた状況である。リス式神殿がもつどっしりとしたしかし簡潔な造形を想起させる形態を作り出している。作家によれば、この素材の感触こそ豊かな表現力を持った絵画や詩を生みだすのだという。

まとめ

地下鉄自体がアテネの都市の発展と文化のシンボル的存在で単なる都市交通以上の意味を持った存在となっている。そのイメージを作り出しているのはまさにここで取り上げた美術作品である。商業的な宣伝や売店など雑多な要素は完全に排除されており日常空間でありながら、同時にそれぞれが歴史やその土地にまつわる記憶、人間存在、生活の意味などを考えさせる芸術が作り出す空間である。地下鉄は郊外に向かって徐々に駅を増やしているが、経済危機でアート・ワークは停止している。アートの皆無な新しい駅は想像以上に無味乾燥である。そこに立つとこのアートプロジェクトがいかに優れた計画であったかが実感させられる。（木戸修、木戸雅子）

５．主な発論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 木戸修「取手ストリート・アート・スージ・プロジェクト－始まりから現在まで」環境芸術学会編『アートプロジェクト・エッジ～拡張する環境芸術のフィールド～』環境芸術学会、東方出版社（2015）pp. 90～93 査読無

〔学会発表〕（計 5 件）

① 木戸雅子「現代ギリシャの女性芸術家―ヴァナ・クセヌを中心に」シンポジウム口頭発表『西洋美術：作家・表象・研究―ジェンダー論の視座から』明治学院大学（2014 年 2 月 22 日）

② 木戸雅子 “Η συντήρηση των τοιχογραφιών του ναού 2007-2013, Η συνεργασία των δύο χωρών της Ελλάδας και της Ιαπωνίας,キリスト教考古学会（ビザンティン・キリスト教美術館、アテネ、ギリシャ）（2014 年 5 月 11 日）

③ 木戸雅子「ファネロメニ修道院への道―ギリシャ現代史とともに」日本ギリシャ協会（2014 年 6 月 19 日）

④ 木戸雅子“Εκδήλωση της ολοκλήρωση της συντίλησης της Φανερωμένης ”ビザンティン・キリスト教美術館、アテネ、ギリシャ（2013 年 5 月 10 日）

６．研究組織

(1)研究代表者

木戸　雅子　（KIDO,Masako）

共立女子大学・国際学部・教授

研究者番号：10204934

(2)研究分担者

木戸　修（KIDO,Osamu）

東京藝術大学・美術学部・教授

研究者番号：10126302